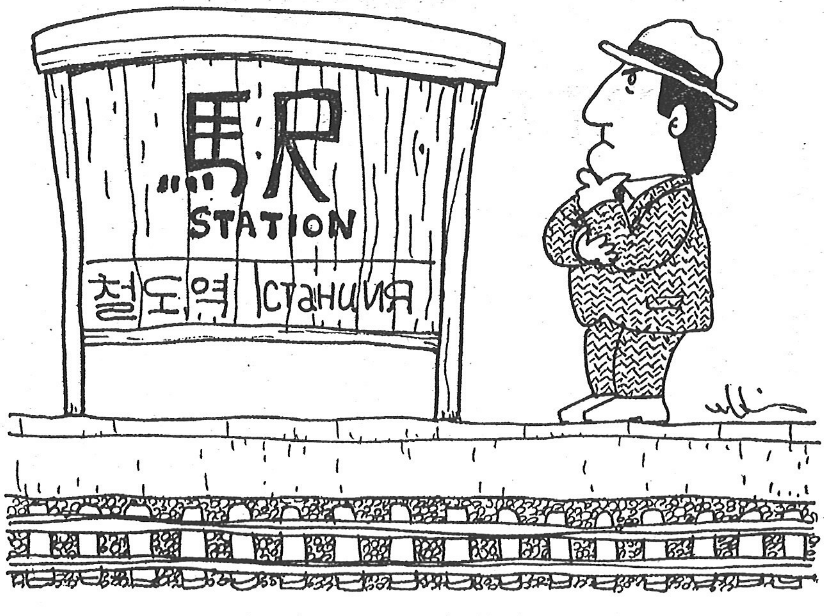
聞いた日本　見た日本

日韓トンネルのすすめ

ジョアンナ・ピットマン
ザ・タイムズ記者

連載 94



イラストレーション／ヒサ クニヒコ

日本が韓国とトンネルでつながったらどうなるだろう、ちょっと想像してみてほしい――もっと長くて交通量は多いだろうが、大規模な青函トンネルのようなものだ。九州の福岡から対馬を経由して韓国の南端にまで届き、車や列車が自由に行き来でき、観光客にも、公用、商用の交通にも便利になる。

同様に北海道が、サハリンや、果てはロシア本土ともトンネルで結ばれるようになったら、どんなふうに感じるだろう？　ロシアから訪問者、ビジネスマン、企業家、観光客が、日本の土地に、仕事を、歓楽を、利益を求めて、何千人も大挙して訪れることになるのだ。

どちらのトンネルも――いまのところ――活発にすぎる想像力が生んだ絵空事でしかない。しかし、商用、私用の交通の流れをより円滑にする国家間、大陸間トンネルという発想は、日に日に実現可能で、実際的で、あたりまえのものにさえなってきている。商業の国際化がますます急速に進むなかで、大陸間の輸送を効率的にする手段の必要性は、これまで以上に明白となってきているのだ。輸送の面で地球が小さくなれば、日本とて遅れをとりたくはなかろう。

あなたがこれを読んでいるあいだにも、オーストラリアの技術者チームが、広大なオーストラリア大陸を横断し、東南アジアと直結、さらに東アジアから極東ロシアにまで伸びる壮大な鉄道網、「アジア・エキスプレス」計画に、早くもとり組んでいるのだ。こんな発想にあなたは仰天し、ショックを受けるかもしれないが、じっさい日本がトンネルによって韓国やロシアとつながるのは、あなたの想像より早いということもあり得る。

十五年、あるいは二十年前、イギリスもほぼ同じ立場にいた。ドーヴァー海峡の底を走るトンネルによって、イングランド南岸とフランスをつなげるという計画が、まじめに、現実的に論じられていた。世論は、このような計画の経済的な実現性に疑いを抱いていたばかりでなく、フランスとの積年の反目を考えて、望ましい計画であるのかどうかも疑っていた。

ついに結ばれた

長年の関係はせいぜいよくて不穏、最悪の場合は全面戦争という形をとってきた。歴史をさかのぼると、イギリスとフランスは初めから敵意をむき出しにしてきたし、英仏関係が今日、第二次世界大戦以後のどの時代より、目に見えてよくなっているということもない。

というわけで、イギリスの歴代首相は、ヨーロッパ人としていいかげんな態度をとることによって、くり返しフランス人を失望させているし、フランスの歴代大統領は、そのお返しに、イギリス首脳よりもドイツの首脳と近づきになろうとすることにつねに熱心なようである、というのが現状だ。両国は、ヨーロッパ連合の中で経済の主権と政治的地位をさかんに競い合うという、すでに確立された伝統を保持しつづけて

いるが、一方では個人レヴェルで、イギリス人はフランス人をふざけて「カエル(を食う連中)」と呼び、フランス人の方ではイギリス人を「けちなローストビーフ民族」と呼んでいるのだ。

受け継がれた口論の歴史は、地理的に貧しいイギリス側に、より重くのしかかっている。イギリスがはっきり隣国といえるのはフランスだけであるのに対し、フランスはスペイン、イタリア、ドイツと——大きな文化圏を形づくっている三国に——隣接している。だから、フランス人がわれわれイギリス人のことを考えるよりもずっと、イギリス人がフランス人のことを考えているのもふしぎはない。フランス人はイギリス人に興味をそそられる程度だろうが、われわれはフランス人にとり憑かれているのだ。こちらが愛を表明すれば、彼らは当然のこととして受け入れる。憎しみを表明すれば、彼らはとまどい、いらだつが、自分たちの問題としてではなく、われわれイギリス人の問題とみなす。

しかし、こうした歴史的、経済的、政治的、社会的障害と制約にもかかわらず、また、一世紀以上も、夢想し、とりとめなく計画し、序盤でつまずき、熱狂し、不信に悩んだ果てに、ドーヴァー海峡トンネルが、昨年、高らかなファンファーレのなか営業を開始し、二つの国はついに結ばれた(もっとも厳密にいえば、イギリスは数千年前には、今より大きかったヨーロッパ大陸と地つづきだったから、初めてとはいえないが)。

利点のほうが大きい

フランス人はここを往復する者のわずか七パーセントにすぎず、利用者の大多数が、南国の太陽を求めて休暇を過ごしに出かけるイギリス人であることが、調査の結果、すでに明らかになっている。わたしも、先ごろこのトンネルを利用してフランスに旅行し、利点を目のあたりにしてきた。一時間足らずのあいだに、寒くて湿気ていて立てこんでいるイングランドが、美しくすっきりして、すばらしい文化、おいしい食べ物やワイン、異なったライフスタイルにあふれた——真にヨーロッパ風な——フランスの、広々とした陽のあたる田舎に変わったのだ。

旅はいつでも視野を広げてくれるし、島国根性の「小英国主義者」が海外に出て、外国の視点から自分の国をふり返ることのできる手段は、歓迎すべきものだ。経済的には、ヨーロッパとの直結ですでに景気が上向きになってきているし(最も頻繁な利用者の中にビジネスマンがいる)、心理的には、イギリス人もまたほんもののヨーロッパ人たり得るのだ、という考えが優勢になってきた。また、イギリスが世界に君臨する貿易国としての強みを失い、未来の繁栄を考えると、ヨーロッパの他の経済大国に接近して同盟を結ぶことにますます頼らなければならなくなっているいま、このトンネルは長期的な政治経済面での恩恵も及ぼすだろう。

概していえば、慎重にガードを固めていた島国がフランスとトンネルでつながれることの苦痛とトラウマは、貿易の振興、政治的信頼、そして——わたしのような小市民にとっては——フランスの田舎の自然をじっくりと見、鑑賞するチャンスといった恩恵によって、すでに薄らいでいる。日本も、予期に反して、近隣の国々とトンネルによってつながれる、不利よりも利点のほうが大きいことに気づくかもしれない。

〔訳・柴田 京子〕

いじめから子どもを守るあなたの気配り

深刻ないじめに悩む子どもたちが大勢います。身近にいる大人が危険信号をいち早く捉え、解消に向け迅速に対応することが何よりも大切。日頃から子どもたちの言動に注意し、異常を見逃さないよう心がけましょう。

青少年を非行からまもる
全国強調月間
7月1日〜31日

政府広報